

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.54)

「疑わない者は、何も知ることは出来ない」

・・・疑うことと信用すること・・・

メキシコのことを少しでも知ろうとして、日頃から、出勤時に配属先近くの、路上にある小店で当地の一流新聞を買っている(一部日本円で100円から120円くらい)。その故あってか小店のおばちゃんは、遠くから私の姿を捉えているらしく、私がある前を通ると、私が「買う、買わない」の意思表示をする前に、手にしていた新聞を自動的に差し出してくる。

広告も少なく紙面の大きさも日本と殆ど変わらず読み応えのある、最低でも100ページ近い紙面をざっと眺め見て、興味のありそうなものを、スキャナーにかけパソコンに取り込んだりしている。

当地の現政権は永い野党時代を経て政権党になったが、下院・上院のねじれ現象、人気が高かった大統領の人気下降、地方選挙での敗戦、野党第2党との連立模索など、どこかの国の状況と似ていなくも無いが、どこかの国のほうが後追いだ。今回の便りはこの政権のことを話すつもりはないので、これらのニュースをキャッチする、一つの情報源としてのマスコミの比較論をしてみたい。

永年読み続けた日本の新聞と、在任期間中の短期間であるが当地の何紙かを読み比べた感じで判断すると、報道の客観性という観点から見ると、当地の新聞に歩があるように感ずる。



各紙そろい踏み・・・厚さが写真では実感できないのが残念



各党の現在の勢いの差を馬で表したもの。下左は現在の政権与党・・・新聞記事から

わが国のマスコミは残念ながら、犯罪がまだ確定していない人を犯人としてセンセーショナルに煽ったり、一人の政治家を永年の間叩き続ける異常さ、民意と称する世論誘導的な、母集団の数の少ない世論調査の連発、芸能人の醜聞など、どうでもいいことを報道する反面、官房機密費や各機関の裏金等の使途問題、軍事基地問題、主権にかかわる他国の干渉、司法の世界の異常さなど、もっと一般の社会生活に大事なものの、いわゆる知りたいと思うことは、及び腰の論調など不思議なことが多い。

当地でも選挙のときは、ネガティブキャンペーン的なことは、行われたように思えるが長くは続かないし、掲載の写真なんかも、新聞によっては目を背けるようなリアル感がただよふ時もある。さらに日本では各紙とも、論調やニュースの内容が変わらないように感ずるのは、ボラッチョ氏だけだろうか。今回のタイトルに採用した、

「El que no duda, no sabe cosa alguna」(エル ケ ノ ドウダ ノ サーベ コサ アルグナ と発音し、意味はタイトルの通りである)という諺がある。なんら疑うことなく信ずるということは理想であり、この諺の本来の意味は、真理の探究や問題解決などにおける、疑問を持ちそれを解き明かすなどによって、物の本質がわかってくるなどに使うのが妥当だろう。

しかし、この諺をマスコミの論調に当てはめるとすると、時として、世論誘導の為に恣意的な報道がなされ

ているかもしれないという事を、疑うことも知らなければならないと思うが、どの手段も右へ倣え式の言論では、それを知る手段は限られてしまう。

昨年、新型インフルエンザ騒動のとき、一時帰国を余儀なくされ、世間の風評被害をおそれて、1ヶ月の間家でじっとしていたので、テレビを見る機会が何時に無く多く、暇に飽かせてチャンネルを回し続けたが、どの局も、専門家の意見よりも、テレビで名を売っている、門外漢の芸能人やコメンテータたちが、深く実体も知らずに、「パンデミック」と言う言葉をむやみやたらと使い、無責任に危険だと言う論評を流していた。

今話題となっている、検察が不起訴とした一国会議員の、土地購入の期ずれ時期記入案件を、検察審査会が再度起訴相当とした事象を、「政治とカネ」と各社キーワードまでも同じ様に使って、内容も変わらず報道している。

読者の依って立つ立場により、見解は変わるだろうと言う考え方もあろうが、ボラッチョ氏のような典型的なノンポリでも、横並び一列でゴールする、小学生の運動会ならいざしらず、これでは何か見えない裏がありそうだと、「へそ曲がり」的精神で逆に考えてしまう。

例えば、精強と言われている特捜部が永年調べた結果不起訴とした事項を、検察審査会と称する素人の委員が短期間で、同じ様な精密さで調べて判断できるのか、国民の平均年齢からして、異常に若い平均年齢構成(それにしても不思議なことだが何回か訂正された)の委員の選定の仕方、審査過程も公表されない、「司法、立法、行政」の三権の埒外にある、この制度について、政治に疎いボラッチョ氏でさえも、上記諺の言わんとしているように、単純な疑問が生じるのに、政治評論家やマスコミは余り論調しない。

なぜだろう？私が今教えている ISO も、審査するときには、審査員の選定、指摘事項も「根拠となる事項」、「不備とする具体的事項」、「証拠」をきちんと公表する。それと比較して、一人の人を犯罪人にするかどうかの重大事項なのに、あやふや感が払拭されない。ここまで書いたら突如頭の思考回路に変調を来たした。



思わず、「舌の根の乾かないうちに」の言葉を思い起こす。似たような発想があるのだろうか
・・・新聞記事から

	A 紙	B 紙
値段	110円位	90円位
社会・政治面	32頁	36
経済	16	10
世界	8	
スポーツ	12	12
芸能・テレビ	24	16
科学技術		12
地域	8	8
広告専門		20
職業案内(求人)		16
総合計	100 頁	130

ある日同時に主要2紙を購入して比較した。他は日本の夕刊紙と同じ大きさのものが多かった。(区分は新聞の区分に従ったが、記事は入り組んでいる)

何がなんだか さっぱりわからず、どれがどれやら

さっぱりわからず わてほんまに よういわんわ、
わてほんまに よういわんわ

何が因果と 言うものか、人の迷惑 考えず人の
気持ちも知らないで わてほんまに よういわんわ、
わてほんまに よういわんわ わてほんまに
よういわんわ あほかいな ややこし ややこし
ややこし ややこし ああ、ややこし わてほんまに
よういわんわ あーしんど

1950 年 (昭和 25 年) ごろ流行った笠置シズ子の、
軽快なリズムの「買物ブギ」の歌 (作詞・作曲は服部

良一) 一部である。野菜だの魚だの名前が沢山出てきて長いので、「えい、面倒だ！」とばかり省略し、より鮮明に覚えているさわりの部分だけを、思わず口ずさんでしまった。

このような歌が出てくること事態、ボラッチョ氏も年をとった証拠だろうし、書いているうちにテ

ンションが上がり、いつものメキシコ便りから脱線してしまったようだ。お叱りを受けるだろうな！

日本に居たときは長い間、某一流紙と称するある新聞や経済紙を読んでいたが、各紙とも論調が同じで特色が無いなら、任期が終わり日本へ帰ったら、新聞の選択をどうしよう。とらなくてもよいという選択肢も考えられるが、その場合は情報源を何に頼ろうか考え始めたら、今日もまたテキーラの杯が増え、気持ちの良い飲み方ではないと反省しつつ、また飲み直してしまった。

(2010年12月12日、配属先の若手社員への基礎講座を終え、後は配属先での、最終成果報告会だけになりました)